

1

特定の誰かを意識して書く

文章を書くとき、漠然と不特定多数の人に向かって書こうとすると、なかなか文章が浮かんできません。そういうときは、誰か特定の人に向かって「語りかける」つもりで書くと案外うまくいくものです。

文章は基本的に、誰かに読んでもらうために書くものです。相手が上司なのか、同僚なのか、友人なのか。それによって言葉遣いが違ってきます。また、相手が専門家なのか、多少は予備知識を持っている人なのか、それとも全く予備知識を持っていない人なのか。それによっても説明の仕方が変わってきます。

専門家が相手なら、専門用語を使って書いたほうが正確かつ迅速に伝えることができますし、多少の予備知識がある人なら、それを前提に書くことができます。しかし、全くわかっていない人に向かって書く場合は、簡単なことでも丁寧に説明する必要があります。このように、読み手のことを常に意識して

書くことが大切です。

ちなみに、この本は「文章を書くのが苦手な人」を対象に書かれています。ほとんど文章を書いたことがなく、大学生になってレポートや論文を書かなければならなくなったり、社会人になって突然、報告書や提案書の作成を求められたりして困っている人に向けた内容になっています。



伝えたい相手をイメージしながら書く

2

型を覚えると楽に書ける

テンプレート（英: template）とは、「型板」や「^{いがた}鑄型」という意味です。文章を書くとき、自由に書きなさいといわれても、初心者にとっては「何を」「どんな順番」に書いていけばよいのかわかりません。そこで、使うのがテンプレートです。テンプレートに当てはめて書くと、説得力のある文章を速く書けるというメリットがあります。この節では、文章を書くための基本的な型についてお話ししたいと思います。

1 昔からある「起承転結」

日本で教えられる唯一の型は「起承転結」と呼ばれるもので、ジャンルを問わず推奨されます。起承転結はもともと中国の絶句（四行からなる短い詩）と呼ばれる漢詩の組み立て方でした。「起」で話題を提供し、「承」で深掘りする。そして「転」でガラッと違う話題に転換し、最後の「結」で締めくく

ります。このテンプレートは四コマ漫画や、話し上手な人のスピーチによく使われます。よく引き合いに出される代表的なものとして、次の例があります。

起 京の三條の^{いとや}絲屋の娘、

承 姉は十八、妹は十五

転 諸国大名は刀で殺す、

結 絲屋の娘は目で殺す

今でも多くのドラマや小説でこの手法が使われています。たいていの場合、「転」のところで視聴者の予想を裏切るような仕掛けが組み込まれます。あいつが犯人に違いないと思わせておいて、実はそうではない。そして「結」になだれ込む。その際、「結」の直前に、主人公が殺されるかもしれないというような波乱を入れておくのが鉄則です。そうすれば最後のハッピーエンドの喜びが倍増して、視聴者はすっきりした気分を味わうことができます。起承転結の手法は「転」のところに筆者の大きな自由度があって、ストーリー性のあるものを書くときの手法として非常に優れているといえます。例えば次の文章を読んでみましょう。

2 世界標準は「主張・本論（根拠）・結論」

日本で人気のある起承転結も、アメリカでこの手法を用いてエッセイ（小論文）を書くと信じられないような低い評価をされてしまいます。なぜなら文章の構造が全く異なるからです。

アメリカで使用される型（テンプレート）は、最初に自分の主張を述べ、次にその主張の根拠を三つ挙げ、最後にもう一度最初の主張を繰り返す、というものです。アメリカ流のこの書き方は、今やほとんど世界標準となっています。アメリカでこうしたテンプレートが発達したのは、文化が異なる人間が集まってできた国だからです。そもそもエッセイ（小論文）とは、人を説得するための技法です。文化が異なる人を説得するために、自分の主張とその根拠を効率的な形で示す。これがアメリカ流です。具体的には、

主張 …………… 私はこういうことを主張したい

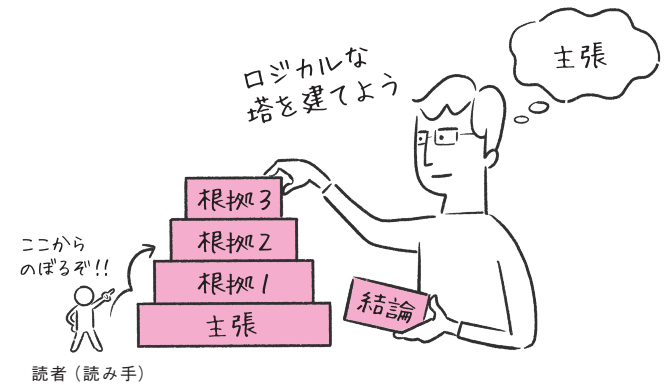
本論 …………… その根拠は以下の3点である

根拠 1

根拠 2

根拠 3

結論 …………… だから私の主張は妥当である



文章構造を考える

というものです。全部で5部構成です。各パラグラフを書いて、全体を積み木のように積み上げるイメージです。こうした書き方を小学校1年生から中・高、さらに大学でも習います。実は、こうしたやり方は、普段私が高校生に行なっている指導と全く同じです。私はこの方法を、たくさんの生徒に対する小論文指導から独学で見出しました。この本では、アメリカ流のテンプレートを中心にしながら、私が考案した独自の手法を説明したいと思います。

アメリカ式テンプレートのよいところは、結論（＝主張）が最初に示されることです。一方、起承転結は、結論が最後に来ます。そのため日本人がアメリカに留学し、起承転結で作文を書くと、「主張が最後までわからない」として低い評価になっ

1

下書きメモを作る — ステップ1

「文章は五つのステップで書け」というのが私の主張です。なかでも最初の「下書きメモを作る」というステップはとりわけ重要です。これまでの経験から、文章が苦手な人も下書きメモの作り方の要領をマスターすると、飛躍的に書く力が伸びていきます。

文章を書く際、自分でテーマを設定する場合と、あらかじめテーマが与えられる場合がありますが、ここでは前章に引き続き、テーマが与えられ、しかも調べることが許されないという厳しい条件のもとで文章を書く方法を説明したいと思います。

1 手を動かす

テーマが与えられた場合、関連する知識は多いに越したことはありません。しかし、多くの場合、テーマに関する予備知識がほとんどなく、どこから手を付けてよいのかわからなくなる

というのが普通です。

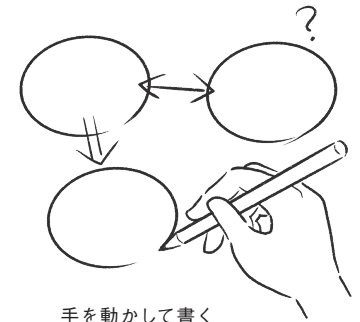
そこでオススメしたいのが、「手を動かす」という方法です。手は第二の脳です。まず、大きな紙（A4以上）を用意し、その紙に知っていることや思いついたことをどんどん書き出します。いわば、1で行なうブレインストーミングです。

知識の整理をする

大きな紙にテーマに関連することを思いつくままに書き出す。

パソコンで行なう方法もありますが、私は鉛筆を使って紙に書き出す方法でやっています。理由は三つあります。第一に、手を動かすと脳が活性化します。第二に、書いた内容をマルで囲ったり矢印で関連付けたりして、内容を整理することができます。第三に、スペースが広いので、自由に書き足すことができます。

一般に、文章が苦手な人は頭の中だけで考える傾向があります。これに対して文章が得意な人は、とにかくよく手を動かし



手を動かして書く